

（みちのものがたり）家康の「伊賀越え」 滋賀県、三重県 本当は「甲賀越え」だった？

奈良記事

2020年6月13日 3時30分



甲賀から伊賀（横山地区）に入ると、急に古道が現れた。樹林に囲まれ「敵」に見つかる恐れは少なそうだが、意外に明るい＝三重県伊賀市



本能寺の変で織田信長がこの世から消えたのを知って、誰よりも命の危険を感じたのは、後に神様・東照大権現としてまつられた徳川家康だろう。何しろ「敵」のまっただ中に、主従わずか30人余で放り出されたのだ。

==== ↓ここから続き =====

領国三河から200キロも離れた堺で物見遊山を楽しみ、京都に上る途中だった。家臣は後の「徳川四天王」を含む精鋭ばかりとはいえ、明智光秀の軍勢に見つかればひとたまりもないし、信長亡き今、付近の武将が敵か味方かわからない。村々は武装し、領主でない武士を襲うのは珍しくない。実際、随行した高力清長は「各所で一揆が襲ってきたので追

い払い、鉄砲傷を負った」と後に記した。途中まで一緒だった穴山梅雪（武田信玄の甥（おい））は村人に殺された。

家康は三河、遠江、駿河を治める大大名。首を挙げれば恩賞は思いのままだろう。

取り乱した家康は、帰依する浄土宗の本山知恩院で腹を切るとも、負けを覚悟で光秀と一戦交えると叫んだともいう。結局家臣にいさめられ三河へ逃げ帰ることに。後に「生涯第一の艱難（かんなん）」とされる逃走劇「神君伊賀越え」だ。

本能寺の変の当日、天正10（1582）年6月2日に信長の死を知り、宇治田原を通り、多羅尾光俊に迎えられ信楽（滋賀県甲賀〈こうか〉市）の小川城で1泊、柘植（つげ）（三重県伊賀市）の徳永寺で休憩し、白子（鈴鹿市）から船に乗り、4日深夜か5日未明に大浜（愛知県碧南市）に着いた。だが「伊賀越え」なのに、伊賀をどう通り抜けたのかは3説あって決着がつかない。

*

以前の主流は御斎（おとぎ）峠（古くは音聞峠とも）ルート（地図〈1〉）。服部半蔵率いる伊賀忍者数百人が御斎峠に集まり、家康主従を守るシーンは小説などでおなじみだが、支持する声は少ない。現在の学界の通説は、桜峠を経て丸柱などを通り柘植に至る最短ルート（〈2〉）。膳所（ぜぜ）藩主などを務めた石川忠総（ただふさ）の「留書（とめがき）」にある。家康に随行した縁者に聞いたとされるが、書かれたのは伊賀越えの半世紀以上後だ。

信頼が置ける同時代の史料（1次資料）に立ち返ってみよう。わずか2点しかなく、「伊賀越え」なのに2点とも隣の甲賀の史料だ。一つは信楽の北隣を治めていた山中氏に残る。家康が、信長の縁者をかくまった蒲生賢秀・氏郷親子をねぎらい光秀を討つ決意を示した私信の写しで6月4日付。山中氏は伝令役で、写しが残ったとみられる。

もう一つは、伊賀の国境に近い和田の領主和田定教（さだのり）への起請文（きしようにもん）（誓約書）。家康が三河に帰ってから送ったとみられ6月12日付だ。「（裏切らぬよう）人質を出して（道案内して）くれて結構なことでした。今後しかるべき処遇をします」。和田を通ったのは間違いないだろう。

織豊時代に詳しい三重大学の藤田達生教授（61）は言う。「伊賀越えというよりも、甲賀越えだった」

同時代史料には服部半蔵も伊賀忍者も登場しない。逆に当時の伊賀は危険すぎた。信長は前年、伊賀へ総攻撃をかけ、村を焼き払い「皆殺し」と呼ばれた。伊賀衆の恨みは強く、本能寺の変の直後、地侍が蜂起し信長傘下の福地氏らを追放した。信長の同盟者・家康からすれば「伊賀は避けたい。通るにしてもできる限り短く」が本音だ。一方で甲賀衆は早くから信長に接近し、家康も心安い。「甲賀衆に道案内してもらい、伊賀を避けて回り道を通り、柘植に入ったと考えるのが自然だ」

■忍者の末裔が唱える新説

甲賀忍術研究会元会長の渡辺俊経（としのぶ）さん（82）は甲賀忍者の末裔（まつえい）だ。曾祖父は甲賀出身で尾張徳川家の最後の御忍（おしのび）役（謀報〈ちようほう〉係）だった。定年を機に帰郷、郷土史を調べるうち「家康は主に甲賀を通った。伊賀越えではなく甲賀伊賀越えと呼ぶべきだと確信した」。

渡辺さんによれば「伊賀越え」「伊賀路を通り」の表現は本能寺の変当時の史料にはほとんどなく、半世紀たった頃から増えてくる。

家康を泊めた多羅尾氏は関係の深い甲賀衆に警護や道案内を頼むはずで、起請文が和田に残るのはこのためだ。

加えて、家康は逃避行を助けてくれた相手に様々な形で報いた。これが甲賀を通った状況証拠だという。多羅尾氏は江戸期を通じ代官職を世襲。一代限りが通例だから異例の厚遇だ。警護などをしたとみられる甲賀衆はいずれも500石以上の旗本に。家康が休んだ徳永寺に、瓦に葵（あおい）のご紋の使用を許し、藤堂藩を通じ周辺の土地などを与えた。船を手配した角屋秀持に廻船（かいせん）自由の特権を与えた。

片や伊賀出身者は「伊賀同心」と呼ばれ、足軽同然の下級武士。家康の危機を救ったにしては軽すぎる報賞で、伊賀者は神君伊賀越えで活躍していないと主張する。

渡辺さんと、同研究会の村井栄一さん（71）、谷和幸さん（55）らは、江戸期からある古道を中心に、家康が通った可能性があるルートを想定し整備している。5月半ばに記者も3説の道をたどってみた。

*

甲賀伊賀越えの想定ルート（〈3〉）は横山地区でいったん伊賀に入り、再び甲賀に戻って和田を通り柘植に抜ける。全体に高低差が少なく、駆け抜けることも出来そう。何より県境周辺は樹林の中で周囲から見えにくく、逃げるには安心だ。

定説の桜峠ルート（〈2〉）は伊賀に入ると山裾に開かれた集落をつなぎ、平坦（へいたん）な街道が柘植まで続く。視界が広く、数十人の武士団が動けばすぐに見つかるだろう。隠密行動には不向きだ。御斎峠ルート（〈1〉）は距離が長く、峠からいきなり数百メートルの崖下りを強いられる。よほど強く勧められない限り選ばたくない。

堺から白子までは約150キロ。和泉、摂津、河内、山城、近江、伊賀、伊勢と7カ国をたどる。伊賀の通過距離は長くても約20キロなのに、なぜ「伊賀越え」と呼ばれるのか。

藤田教授は「権現様の一大事を伊賀出身者が中心になって助けたという構図を、伊賀者自身も幕府も強調したかったからだ」という。

伊賀越えの途中、服部半蔵率いる伊賀者が家康を助け、その直後、全員が召し抱えられたという「物語」は、八代将軍吉宗の治世に「伊賀者由緒書」の中で突如出現する。

藤田教授によれば、主に諜報役を担った伊賀同心は足軽同然の軽い扱い。平和が続いて仕事が減り、困窮していた。「神君家康を助けたのは俺たちだ」と強調することでも名誉も仕事も欲しかった。「いわば、伊賀者の形を変えた就職活動ともいえる」

吉宗も伊賀者に注目を集める必要があった。当時「伊賀者」は伊賀出身者だけでなく諜報活動に携わる人全般を指すようになっていた。紀州藩主から将軍になった吉宗は紀州出身者を含む「伊賀御庭番」を組織し、積極的に情報収集した。重みを持たせるため「家康を助けた由緒正しき伊賀者を駆使していると思わせたかった」。

「神君の伊賀越え」「生涯第一の艱難」という表現が使われ、定着するのはさらに時代が下がって天保年間。歴代将軍の事跡をつづる「徳川実紀」に登場してからだ。徳川幕府の命運が尽きるまで残り20年あまりに迫っていた。

(文・畑川剛毅 写真・矢木隆晴)

■今回の道

天正10年、徳川家康は織田信長とともに甲斐に侵攻、武田家を滅ぼし、恩賞として駿河を拝領した礼を言うため安土城を訪れた。京都を経て堺を見物、信長に会うため再び京都に向かう途中、本能寺の変を知った。

堺以降、家康主従がたどった正確な道は分からないため、地図は概略のルートを示した。

詳細図にある三つの伊賀越えルートのうち、甲賀を通るのは甲賀忍術研究会が示す「甲賀伊賀越えルート」(地図〈3〉)。倒木を除き下草を刈るなどの整備が続いているが、槇山付近は私有地もあり、有害鳥獣対策のための柵も設けられ、無断で立ち入ることはできない。また、和田の南の県境付近はゴルフ場の中を通るため、通行できない。ガイドの案内が必要で、連絡は甲賀市観光まちづくり協会(電話0748・60・2690)へ。

明王寺は四代将軍家綱までの戒名を刻んだ位牌(いはい)がある＝写真。五代将軍綱吉の時代に幕府から寺号が授けられ、周辺の土地を与えられたと伝わるが、理由は明らかでない。

和田付近には、小高い丘を利用し、土塁などで防御する典型的な中世の城跡が点在する。室町幕府最後の将軍義昭が、将軍になる前に奈良・興福寺一乗院から逃れてきて隠れ住んだ「公方屋敷跡」もある。

中央の桜峠ルート(〈2〉)は、石川忠総留書に盛り込まれた地名を参考に柘植までつないだ。

御斎峠ルート(〈1〉)の詳細を載せた史料はない。御斎峠手前にある浄願寺(甲賀市信楽町多羅尾)の「十王石仏」は9体しかない＝写真。欠けた1体は、伊賀越えの際に石仏をかごに乗せ、家康が自分の身代わりにしたという伝承が残る。

■ぶらり

徳永寺(伊賀市柘植町)＝写真＝には、藤堂藩の藩主が代替わりするたびに授けられた寄進状が10通ある。内容はいずれも「付近の土地と田畑を寺領と認め、別に毎年米2石、茶2貫200匁(もんめ)(8.3キロ)を与える」。初代藩主高虎の寄進状＝写真＝の日付は大坂夏の陣の年の10月。静永史範(しはん)住職(69)によると、伊賀越えの途中、出された茶のうまさを感じ入った家康が直筆の寄進状をしたため、夏の陣の後に高虎に引き継いだという。葵のご紋の使用も同じ頃に許されたといわれる。

■読む

「甲賀忍者の真実」（渡辺俊経著、サンライズ出版）は、甲賀忍者の末裔である著者が甲賀の地理と歴史を振り返り、なぞの多い忍者の本当の姿を紹介する。後半に、膨大な史料を読み込んで「神君伊賀越え」は「甲賀伊賀越え」と呼ぶべきだと主張する論考を載せる。

最近の小説で「伊賀越え」を題材にしたものに、「峠越え」（伊東潤著、講談社）、「茶屋四郎次郎、伊賀を駆ける」（諏訪宗篤著、朝日新聞出版）がある。

■読者へのおみやげ

「読む」で紹介した3冊のいずれかを各2人に。住所・氏名・年齢・「13日」を明記し、〒119・0378晴海郵便局留め、朝日新聞be「みち」係へ。18日の消印まで有効です。

◆今回は、東京都民の水がめ多摩湖から東南東へまっすぐ都心に向かうサイクリングロードと井ノ頭通りを歩きます。20キロ余り、ほぼ一直線の道です。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.